イラク

1. 政治状況

イラクにおいては、1958年の共和制革命以降純粋な意味での複数政党制は認められていない。カーシム期（1958-63年）の一時期、第二次バアス党政権初期（1968-80）に限定的に複数政党の合法化が認められたが何れも形式的なもので、現在に至るまで政権党以外の政党に活動の自由は認められていない。カーシム期には共産党が一時期政権を支持する役割を果たし、またアーリフ政権（63-68年）下ではナースィル政権下のエジプト同様の翼賛政党（アラブ社会主義連盟）の中でアラブ民族主義運動やナセリスト集団が政権を支えるのに大きな役割を担ったが、いずれの政権も政党政治に基づくのではなく、個人独裁を基本としていた。その意味で68年に成立した第二次バアス党政権はイラク史初めての一党独裁政権であったが、これも80年代以降大統領個人独裁が顕著化する中で、政党の持つ政治的役割は薄れている。

イラクにおける政党史を要約すれば、40-50年代に最大の大衆動員能力を持つに至った共産党、後発ながらも60年代に軍内に支持を広げたバアス党などアラブ民族主義政党、70年代以降徐々に大衆的支持を広げたダアワ党などイスラーム復興主義政党、40年代以降一貫して民族的自治権を要求し続けてきたクルド民主党などクルド民族主義政党の四つに分類される。これらの中で政権を担うことに成功したのはアラブ民族主義政党だけで、特にバアス党は現在までに29年の長期政権を維持しているが、アラブ民族主義政党の成功要因は軍将校の取り込みに容易に成功したことにあり、必ずしも大衆的支持を伴っていない。そのことが現在に至るまでのイラクにおけるアラブ民族主義政党による強権政治を生んでいる。一方で共産党、ダアワなどイスラーム政党は大衆動員に大きな力を持ちながらも軍、国家中枢への進出を閉ざされ、常に物理的強制手段をもつ政権集団・政権党による弾圧の対象となって国内活動に大きな制約を受けてきた。

こうした大衆的支持を持つ非合法政党が強権的政権のもとで活動の拡大を図るためには（1）支配政党に接近することで権力中枢への浸透を図る、（2）外国勢力の協力のもとに安全な場所で勢力拡大を図る、という二つのケースがあるが、前者の例として共産党があげられよう。68年にバアス党政権が成立した時点で、支配政党となったバアス党は支配の脆弱性を克服するために最大の政敵である共産党を形式的に合法化する一方で、その組織的基盤を掘り崩した。共産党は王制末期にも反体制派の挙国一致の試みの中で民族右派とも共闘を受け入れており、大衆組織を掌握しながらも権力中枢に近づけない

ジレンマの中でしばしばこうした「上からの」アプローチを選択している。しかしこうしたバアス政権への参加は弾圧者側への荷担として批判に晒されることにもなり、ある意味ではこの政権参加が同党の大衆支持喪失の原因ともされる。共産党に限らず、バアス党以外のアラブ民族主義政党の多くは、同様の発想によってバアス党政権内に取り込まれるか、解体されて勢力を失った。

これに対して一貫して反政府姿勢を取って激しい弾圧に晒されてきたのがシーア派を中心としたイスラーム政党である。南部シーア派貧困地域における共産党支持が70年代を契機にイスラーム政党支持に転換したことには、こうしたイスラーム政党の一貫した姿勢が相対的に社会的不満層の多い南部シーア派地域で評価されたためとも考えられる。しかしイスラーム政党の場合、権力中枢への接近が見られなかったかわりに活動の自由を求めて避難先としたのがイランのイスラーム政権であった。イランの国際的孤立状況の中ではそのことはこれら政党の対外広報活動の上で不利に働き、特に湾岸戦争以降はイランから距離を置く政党が増えている。イスラーム政党に限らず国外勢力に庇護を求める反政府組織は一般にイラク国内での大衆支持獲得に困難を生じており、特に欧米諸国に協力を求める諸政党は欧米国際社会による対イラク制裁という構造の中で制裁支持者として国民の目に映っている。治安・軍組織を完全に政権が掌握する中で、国内支持を失う危険性を持つ過度な対外依存を避け、政権への荷担もなく国内活動を維持していくのは、いずれの政党にとっても極めて困難な状況であると言えよう。そのひとつの帰結として、唯一の内部からの政権奪取の道として軍への接近が求められがちなのもイラクの諸政党の特質であり、あらゆる政党にインキラーブ（クーデター）を志向する性格が根強く存在する。

一方で人口の三割を占めるクルド民族を代表し唯一国内的に局地的解放区を維持することが可能なクルド諸政党は、軍事的に最も支配政党に対する対抗可能性を持つが、反体制派の中でクルド政党が上記大衆組織と決定的に異なる点は、それが必ずしも中央政権の質を問うものではないという点である。クルド民族政党の主流は中央政権との交渉によっていかに多くの自治を獲得するかに主眼を置いているのであり、政権の非民主性、独裁性などを問題にして政府攻撃を続けている共産党、イスラーム政党と一線を画する。そのことが常に反体制組織の共闘努力における障害となっている。

2. 制度的概要

イラクでは一応三権分立を前提としているが、バアス党政権下で三権全部に対する党

支配が確立しており、大統領、国家最高機関である革命指導評議会（RCC）と党地域指導部が内閣、裁判所、議会に優越する。特に立法機関の独立は遅れ、1980年に王制崩壊以来22年ぶりに議会が開設された（一院制、定員250人、任期四年）が、重要案件に関わる法案は専ら大統領、RCCが制定し、議員の立案対象となるのは軍事、治安、財政関係を除いた限定的案件に留まる。また議員立候補要件にはさまざまな条件が付与されており、特に68年のバアス党革命を信奉すること、旧資本家・封建主義者でないこと、といった思想的制約が課されて実質的に反政府組織の立候補は不可能である。

この80年の議会開設は民主化政策の現れというよりも、79年に大統領就任したサッダーム・フセインの党支配から距離を置いた個人支配基盤確立のための措置として理解されよう。前バクル大統領が軍人出身で党内軍人に対する掌握能力を維持していたのに対して、フセインは文民出身で、しかも古参党員の間にまだまだ潜在的政敵を持っており、党ヒエラルキーに基づかない地位の正当化を行う必要性を有していた。こうした議会の位置付けは80年代後半以降より強化され、閣僚罷免権などを議会に付与して内閣、RCC、党地域指導部などに対する大統領の優越性を支えるものとして議会が利用された。また89年の第三回議会選挙では特に民主的な選挙を目指すという名目で広範な立候補者を募った結果、党出身議員（党サポーターを含む）の当選は前回選挙（84年）の41%から27%に激減し、また官庁職や党活動を職歴とするいわゆる従来の国家エリートの当選も16%から5.5%に減少した。このことは議会がそれまでのような党、国家行政機関に準ずる組織から脱皮して、従来の党エリートとは別の出自背景を持つ政治組織に再編されたことを意味し、大統領が党外勢力から支配の正統性を得ることを可能とした。

さらに88-89年には上からの民主化政策の一環として複数政党制、大統領直接選挙制の導入を盛り込んだ恒久憲法の作成が進められた。同憲法案は89年に成立した第三次議会で審議された後に施行される予定であったが、90年のクウェイト侵攻により実質的に棚上げにされた。侵攻直前に発表された草案内容によれば、大統領直接選挙、RCCの廃止など大統領独自支持基盤の確立に繋がる側面での改革は取り入れられたが、複数政党制の導入については特定宗派による結党、イラクの一体性を損なう分離主義を排するなどという名目でシーア派中心のイスラーム政党、クルド民族政党の排除を前提としており、73年にバアス党が共産党、クルド政党を誘って結成した国民進歩戦線とたいして違いがない、形式的な複数政党制に留まっている。なお同憲法が規定の手続きを踏んで施行に至ったとは確認されていないが、95年に大統領直接選挙を実施、その後96年に親政権派の元共産党員などを招聘して共産主義、アラブ民族主義、クルド系、自由主義の御用政

党を設立した上で第四次議会選挙を行い、形式上は複数政党制を実現したとしている。

3. 政党リスト

IQ01　アラブ・バアス社会主義党-イラク地域指導部（在イラク、現政権党）Ḥizb al-Ba ʻth al- ʻArab ial-Ishtirāk , Arab Ba ʻth Socialist Party

1940年代にダマスカスでミシェル・アフラク、サラハッディーン・ビタールらが結成した汎アラブ主義政党で、意識変革に基づきアラブの覚醒、統一を実現するインキラーブを目指す。1947年発足大会。52年にアラブ社会主義党と合併して以降社会主義を党政策に取り入れる。同党の活動がイラクに伝播したのはシリア留学のイラク人学生、イラク在住のシリア人を通じてであり、50年前後にイラク地域指導部が設立され、51年にイラク地域の責任者となったフアード・リカービの時代に政党としての組織を確立する。1957年には反体制派連合の国民統一戦線に参加し王制転覆活動に一定の寄与を行ったため、58年成立のカーシム政権下ではリカービが閣僚参加したが、同政権からのアラブ民族主義軍人の退場とともに政権から遠ざけられた。63年のアブドゥッサラーム・アーリフによる政権奪取に協力した結果、政権成立直後の国家最高機関である革命指導国民評議会に多くのバアス党党員ないしそのシンパが起用された。しかし民兵組織である国民防衛隊を指導するアリー・サーリフ・サアディを中心としたバアス党文民勢力の一部が無頼集団化して社会的混乱を招き、その処置を巡って党内派閥対立が激化、党内に収拾能力なしと見たアーリフはバアス党を政権から排除して、バアス党の第一次政権は九カ月の短命に終わった。地下活動に入ったバアス党は党内派閥整理を行い65年バクルが事務局長に、66年サッダーム・フセインが副局長に就任してバクル／フセイン体制の基礎を築いた。68年アーリフ下の共和国防衛隊の一部将校の協力を得て政権奪取に成功、二週間の過渡期間を経てバクルを大統領とする一党独裁体制を確立する。その後70年代半ばまでフセインによる他の主要党員、軍人に対する覇権抗争が続いた結果、75年以降フセインの党内でのナンバー2の地位が確立された。79年にフセインが大統領に就任して以降は個人独裁の色彩を徐々に強める。

党成立当初の党員には宗派・出身地での偏向は特に見られないが、63年以降の派閥整理の結果スンナ派党軍人、特にバクル／フセインの同郷者集団であるティクリーティ閥が党の中核を占めるようになった。過去のクーデターにおける軍人の役割を重視して軍に対する党の監視を最大優先事項とし、軍内部に特殊党機関を配置、軍人の昇進に党教育を義務づけるなどの軍の「バアス化」を進めるほか、他政治組織の対軍接触を固く禁

じた。フセイン政権になるとさらに近親者の要職起用を進め、80年代半ば以降はネポティズムによる党ヒエラルキーへの侵食が顕著となった。

党組織は数人の党員からなる細分化された細胞組織を基礎としたピラミッド型に形成されており、最終的には地域別に組織された4～5の地方組織に束ねられ、さらにそれを地域指導部が統括する。地域指導部メンバーは形式的には党指導部大会（不定期）での選挙によって選出され、定員は決まっていない。名目上は地域指導部の上位に党民族指導部が存在するが、63-5年のシリアでの民族指導部と地域指導部の対立を契機として以降イラク独自に設置することとなったこの指導部は、イラク・バアス党の正統性を強調するためだけの形骸的組織でしかない。また地域指導部の下には農民組織、労働者組織、女性組織、学生青年組織など各大衆組織のほか、職業別に組織した専門組織が配置され、大衆統治を地域別・階級別・職業別と多重に行う形式を取る。こうした組織形態は共産党のそれを模したもので、最大の政敵であった共産党の、特に農民、青年、労働者層における支持基盤を切り崩すために設立された。組織人員は63年時点で830人、党員候補者（正式党員の資格を与えられる前に一定の訓練期間を課されている段階の者）を含めると1万5000人であったが、70年代のバアス化政策によって80年には人口の約一割の150万人が党員、党員候補となったとされる。

党の基本イデオロギーは「（アラブの）統一、（植民地主義、外国支配からの）自由、社会主義」であるが、80年代半ば以降経済自由化を進めた結果、社会主義政策はすでに有名無実となり、従来の中間層、下層階級を対象とした経済的恩恵は次々に廃止された。特に湾岸戦争以降生じた中間層の崩壊、小数富裕層による経済独占状態の中で、党が70年代に掲げていたポピュリスト的政策は姿を消している。またアラブ統一思想については、対イラン戦争、クウェイト侵攻などの対外政策において大義名分として掲げられることが多いものの、実際の国家統合計画（70年代末に計画された対シリア統合案など）に対しては常に否定的な姿勢を取ってきた。

IQ02　イスラーム・ダアワ党　Ḥizb al-Da ʻwa al-Islāmī Islamic Dawa Party

50年代のイラク国内での共産党勢力の台頭に対して、ウラマーの危機感が高まる中で1957年に成立したイスラーム復興主義組織。ムハンマド・バーキルッサドルの思想をその中核とする。主要な創設者はバーキルッサドル、ムルタダ・アスカリ、マフディー・ハキームら。運動を四段階に分け、第一段階の文化活動期が79年まで続いた後に第二段階の政治活動期に移行、現在は政治活動期に第三段階の革命・軍事活動期が重なった状

態にある。政権を奪取した後に第四段階の統治活動期に移行する予定。

第一段階においてはその活動は極秘状態に置かれていたが、大学などを中心に青年層に支持を広げた。アーリフ政権期（1963-68年）には民族主義勢力の反共政策の一環として対イスラーム勢力への妥協的政策が見られたことから教宣活動が活発化し、特に64年に設立が認められたバグダードの神学大学（Kullīya Uṣūl al-Dīn）ではアスカリ、アーリフ・バスリら初期の党幹部や現在の思想的中核であるムハンマド・アースィフィーらバーキルッサドルの弟子がその中心的教授陣となった。68年にバアス党政権が成立して以降はこれら中心的党活動家に対する弾圧、処刑が開始され、学生動員担当のアブドゥッサーヒブ・ドゥハイルを初めとしてバスリら幹部が70年代前半に相次いで処刑、マフディー・ハキームやアスカリなどは国外脱出を余儀なくされた。また同時期神学大学は廃止され、これらの党の中心的ウラマーは合法的な教育機会を失った。さらに74年、77年のアーシュラーで行進参加者の政府批判に対して大規模な軍による鎮圧行動が取られたことは、党の対政府対立姿勢を強めた。こうした国内情勢に79年のイラン革命が加わって、文化活動期を終えて政治活動期に移行、海外支部を含め国内外での活発な政治・情宣活動が展開された。その後党員に対する大量逮捕、処刑はエスカレートし、80年にはバーキルッサドルと女性対象の教宣に当たっていた妹のビント・ホダーが処刑された。同党は、反体制派の中で唯一、何等かの関わりを持っただけで処刑対象となる旨の法律が適用される組織である。

現在のシーア派を中心とするイラク・イスラーム政党のほとんどは同党から分離したもので、主な組織に80年に党軍事派が分離して成立したムジャーヒディーン運動、70年前後に分離しアスカリ師を支持するイマーム戦士運動、80年に選挙の是否を巡り分離したバスラ出身者グループのダアワ・イスラミーヤなどがある。

同党の思想はサドルの「法学権威の指導」論を核とするもので、サドルは神の統治(hukm)、イスラーム法統治のもとでイスラームの法学権威が協議により政府・立法機関への指導を行うイスラーム国家の樹立を主張。現在の党政治プログラムでは（92年）現政権の独裁性、抑圧性を最大の問題として現政権転覆を第一課題とし、転覆後は党外各派との共闘に基づく臨時政府を樹立、恒久憲法の制定、抑圧機関の廃止、政治的自由の確保と人権の保障、自由選挙と議会設立を実現し、自由選挙に反映された民意に将来の政体のありようを委ねるとしている。また宗教、宗派、民族的差別政策を排し、女性の政治参加を保障、軍の政治・党派間抗争への利用を禁止、周辺アラブ・イスラーム諸国との関係改善を主張する。

支持基盤はウラマーから一般信徒まで各層に広がり、特に青年層、都市貧困層に動員力を持つ。現在の指導者アースィフィーはイラン在住だがイランとは一定の距離を置き、独立性を保っている。イスラーム政党の中では最も組織だった緻密な党構成を取り、活発な国内活動を維持する。シーア派を中心とする組織ではあるが、一部のスンナ派イスラーム活動家とも協力関係を持つ。

IQ03 イラク・イスラーム最高革命評議会 al-Majlis al-A ʻla lil Thawra al-Islāmīya fi al- ʻIraq, Supreme Council for the Islamic Revolution in Iraq, [SCIRI]

1982年にイラン亡命のシーア派ウラマーを中心にテヘランで成立、当初マフムード・ハーシミを議長、ムハンマド・バーキル・ハキームをスポークスマンとしたが、後にバーキル・ハキームが議長に就任した。各イスラーム組織の共闘、戦線統一を目的として設立され、ほとんどのシーア派中心のイスラーム組織のほか、スンナ派のクルド・イスラーム運動、クルド・ヒズボッラーが参加。同評議会設立一年後には国内に残るバーキル・ハキーム一族のうち100人以上がイラク政府により逮捕、一部処刑された。しかしその後独自の党活動をより重視するダアワ、アマルなどは同評議会内での活動を実質的に凍結し、現在ではイマームの戦士運動、ムジャーヒディーン運動などの中小組織の統括に力を持つ。イラク北部に三つの支部、南部湿地帯に一支部を持つほか、軍事組織としてファイラク・バドル部隊を持ち、特に南部イラクでのゲリラ活動を展開する。

バーキル・ハキームは50-60年代に大アヤトッラーであった故ムフシン・ハキームの息子として広範な支持を得ており、組織力のダアワ、広報力のアマルに対して精神的支持の広さが特徴と言われる。思想的にはバーキルッサドルの提唱するイスラーム復興主義に近く、幹部にはダアワ党結成関与者、サドルの子弟も多いが、故ムフセン・ハキームのイスラーム復興主義はサドルのそれに比較してハウザの伝統的思想の域を越えるものではなく、ハキームの指導力は自身の思想的革新性よりも父及び一族のカリスマ性、伝統的紐帯に依存する側面もある。イランに本部を持ちイラン政府の影響を強く受けると言われ、イランでの地歩を基盤に亡命イラク人の保護、国境地域の難民救済など、積極的な社会活動が同組織の支持にも繋がっている一方で、加盟組織の間にはイランの傘のもとでの行動の制約を嫌って同組織から距離を置こうとする傾向も見られる。特にイラン・イラク戦争期（80-88年）にはイランからの積極的な支援を得られたものの、湾岸戦争以降はイラン政府の戦略的判断から特に軍事的部門での支援が減少していると言われ、湾岸戦争直後の三月暴動ではイラク国内での軍事行動の展開を希望したフェイラク・バ

ドル部隊のイラク国内入りをイラン政府が止めたとも伝えられている。

基本的にはイスラーム国家の樹立を目指すが、現政権転覆後の政体に関しては国民の自由選挙の結果に委ねるとし、民主主義については、神の統治のもとでの制度としての民主主義、すなわち複数政党制、政治的・思想的自由、自由選挙などの導入を主張する。

海外支部はシリア、欧米諸国に広く設置され、クウェイト、サウディとの外交的往来もあり、国外広報活動も盛んである。

IQ04　クルディスタン民主党　al-Ḥizb al-Dīmūqrāṭī al-Kurdistānī, Kurdish Democratic Party［KDP］

1946年、共産党系のクルディスタン解放党など諸組織がハムザ・アブドゥッラーを中核に再編されて結成。59年党首にイラン・マハーバード共和国設立時の軍事指導者ムスタファ・バルザーニを迎えた。これにイブラヒーム・アフマドを中心とするイラン・クルディスタン民主党イラク支部も合流したが、左派民族主義路線を取り共産党に傾斜するイブラヒーム・アフマドなど都市知識人の政治局員の多くはムスタファの封建的・部族的体質に潜在的不満を抱いた。特に63年以降のムスタファの対アーリフ政権単独交渉を巡って内部対立が激化、その結果、バルザーニ部族の軍事力を前にして劣勢に陥った政治局幹部はイランへの脱出を余儀なくされ、ムスタファのKDP単独支配体制が確立した。

68年に政権を奪取したバアス党はクルド勢力に対する宥和政策を取り、70年にクルド自治を認める旨の「三月宣言」を行った。ここに初めて「クルド自治区」の設定が約束され、また公教育の場でのクルド語使用許可や副大統領職へのクルド人登用等の方針が打ち出された。しかしその後の実施細目の交渉において、キルクークなどの自治区編入を主張するムスタファと限定的自治に固執する政府の間で合意は成立せず、逆にムスタファ暗殺事件や政府によるクルディスタンへのアラブ住民の強制移住が頻発したため、双方決裂状態のまま政府は74年、自治区制定と限定的権限しか持たない自治評議会と執行委員会の設立を強行した。それに反発したムスタファはイランと米国の支援を期待して大規模反乱を開始、激しい武力衝突に発展した。ムスタファは72年にイランの軍事援助を得ることに成功したが、75年アルジェ協定締結でイランからの武器供給が途絶えるとクルド勢力は軍事的に瓦解し、ムスタファはイランを経由して米に逃亡、79年に死亡した。

反乱失敗とムスタファの死去によってKDPは崩壊、ムフタファの息子、マスウードと

イドリースのバルザーニ兄弟は父親の基盤を継いでKDP暫定指導部を引導した。80年代にはイラン政府と友好関係を維持、87年にイランの仲介により政敵PUKとクルド戦線に参加。湾岸戦争後はPUKとともに対イラク政府交渉、クルド自治政府の樹立を主導し、党首となったマスウードはイラク国民会議の最高指導部の一人に任命されて反政府活動の中心的存在となった。しかしPUK、特にタラバーニとのクルド民族運動の指導的地位を巡る個人的対立は解消されず、92年のクルド議会選挙ではPUKと半数ずつの議席を分けあう結果となったことから、以後クルディスタン人民民主党、クルド社会党などの一部をKDPに統合、クルド・イスラーム運動との協力関係を推進するなどによって議席拡大を図った。94年以降はPUKとの直接武力衝突を起こし、対トルコ交易の国境地点イブラヒーム・ハリールを抑えてクルド地域の財政収入を独占した。96年8月にはPUK掃討作戦を決行、クルド地域におけるKDPの完全優位を確保した。しかしその際にイラク軍の協力を要請し、湾岸戦争後に反政府活動の聖域と化していたクルド地域へのイラク政府の介入を招く結果をもたらしたため、イスラーム派など他の反政府組織からの反感を買う結果となった。

党の政治的影響力は民族的英雄であるムスタファ・バルザーニに対するクルド民族の精神的尊敬とバルザーニ一族の軍事力に基づいており、バルザーニ一族の居住するクルド地域北部・北西部を拠点とする。指導部ではムスタファの子孫が要職につき、そのことから同党を封建的部族支配、バルザーニ一族の独裁として批判する声も強い。92年以降の党の基本政策はイラクにおけるクルド・アラブによる連邦制の樹立であるが、クルド自治拡大の約束を取り付けるためには交渉相手を選ばないという傾向が強い。

クルド地域を中心にイラク国内に活動基盤を持つ最大の反政府組織であるが、国外にはシリア、ヨーロッパ各国などに支部を持ち、外交活動も盛んである。

IQ05　クルディスタン愛国連盟　al-Ittiḥād al-Waṭanī fī Kurdistān, Patriotic Union of Kurdistan, [PUK]

ジャラール・タラバーニ党首。KDPより分派した総合政策グループ（Jama'a al-khiṭṭa al-Ām）、クルド社会運動（al-Ḥaraka al-Ishtirākīya al-Kurdistānīya）、クルド労働団（'Asaba Kādiḥī Kurdistān [Kumala]）の合併によって1975年設立。タラバーニは元々ムスタファ・バルザーニのもとでKDPの中心メンバーであったが、63年に対イラク政府交渉を巡りバルザーニと対立、75年にイラク政府による大規模なKDP掃討作戦が実施されてバルザーニ勢力が国外に逃亡して以降、同組織を設立して国内クルド地域におけるクルド運

動の実質的な指導者となる。主要な支配領域は、タラバーニの出身地であるスライマニヤを中心としたクルド地域東部、イラン国境寄りの地域にある。

83-4年にイラク政府と自治権拡大交渉を行うも成果が得られず、87年対政府交渉を断念してKDPとともにクルド戦線を設立。湾岸戦争後はKDPとともに再度イラク政府と自治権拡大交渉に望んだが、実質的な成果が得られず、1992年クルド自治政府の設置にKDPと共同歩調を取り、クルド議席の半数を確保。自治政府機能を高めることでバルザーニのクルド地域でのカリスマ的支配を排除しようと企図し、各党が持つ民兵集団であるペシャメルガを廃止してクルド政府軍を設立する試みを行ったが、KDPの反発にあって頓挫した。さらに93年以降のクルド・イスラーム運動との武力衝突、94年以降のKDPとの大規模衝突によってクルド政府は機能を停止し、トルコ国境での関税収入を独占するKDPによって経済的孤立を余儀なくされた。96年7月には隣接するイランからの協力を得たことで、KDPとイラク国軍の共同作戦による攻撃を受け、支配地域であったアルビル、スライマニヤから追放され、国境山岳地域に追いやられた。11月には米国の仲介によってKDPとの和平が一応成立している。

その支持基盤は、バルザーニ支配の封建性に反発する都市中間層、左派知識人、農民、労働者にあると言われるが、同連盟の設立が右派の総合政策グループ、左派マルクス主義のクルド社会運動、クルド労働団から成り立ったものであることから、そのイデオロギー傾向は流動的である。特に88年の対クルド化学兵器攻撃、89年の東欧社会主義体制の崩壊以降、組織内でマルクス主義思想は後退、西欧型社会民主主義を標榜する。並行して欧米諸国との関係強化に重点が置かれ、特に党首タラバーニは湾岸戦争以降米国との密接な関係を維持する。

現在の同連盟の要求はイラクにおけるクルド・アラブの連邦制の導入、フセイン政権後の民主的体制の確立。ただし状況に応じてイラク現政権との交渉にも応ずる。

活動の中心をクルド地域に置くが、シリア、ヨーロッパ各国にも支部を持ち、外交活動も活発である。

IQ06 イラク国民会議 al-Mu'tamar al-Waṭanī al-'Irāqī al-Muwaḥḥid, Iraqi National Congress [INC]

1992年6月に行われた欧米在住イラク人政治家を中心とする反体制合同会議（ウィーン会議）にて設立。87人のメンバーから成る各種イラク反体制派の統括組織として設立され、同年10月のクルディスタン・サラハッディーンでの大会で主要政党がほとんど参加、

メンバー数は234人に増加し、その結集力を示した。第二回大会で26人の執行委員会のほか、クルド代表（マスウード・バルザーン）、アラブ・スンナ派代表（ハサン・アンナキーブ）、アラブ・シーア派（ムハンマド・バハルウルーム）による指導部を設置し、アフマド・チャラビを議長、ハーニー・フカイキ（97年死去）を副議長とする。専門委員会として政治委員会、憲法委、経済委、広報委、作戦委、救済委、人権委を持つ。イラクの恒久的独立、領土的一体性の維持、立憲民主制、複数政党制の確立を目的とし、資金の潤沢さを活かしてクルディスタンに拠点を構えてラジオ、テレビ局を開設、国内外での新聞、ファックス情報サービスなど国内向け反体制報道に力を持つ。

初めてのイラク反体制派の合従連衡を謳った組織として注目を浴びるが、一方でそれに先んじて反体制統合の試みを行ってきた共同合同委員会と同委員会が開催した91年のベイルート会議参加の主要組織は、同会議に対し当初から否定的な姿勢を取っていた。同会議設立の中心となったのが主に欧米在住イラク人で、アフマド・チャラビ、元ダアワ党員のライス・クッバ、シーア派ウラマーのムハンマド・バハルウルームなど組織を代表しない個人活動家が重要な役割を占めていたこと、当初より欧米の精神的・経済的支援を前提とした成立であったことがその原因である。またクルド勢力がウィーン会議前後よりイラクにおけるアラブ・クルドの連邦制を主張し同会議の主導権を握ったことが、特にイスラーム諸派、アラブ民族主義派の協力を消極的なものとした。92年のサラハッディーン大会ではKDP、PUKを主催者としてダアワ党、イスラーム行動組織、SCIRI、イラク社会党、バアス党在シリアイラク地域指導部、イラク自由評議会、共産党、アッシリア民主運動、トルコマン連盟など主要政党を初めとして30組織が参加したが、翌月の第二回会議ではバアス党、イラク社会党などアラブ民族主義派が会議をボイコット、執行委員会の民族的・宗派的配分についても会議参加者の間で対立が生じた。

特にイスラーム政党は同年11月にアマルが脱退、ダアワ党、SCIRIも大会決議を保留、その後93年にはダアワが脱退、SCIRIも実質的に活動を凍結した。その後共産党も資格凍結して再び組織参加者ではなく個人参加者を中心とする機関に戻った。また執行委員も93年以降次々に資格凍結、ないし脱退し、三人からなる最高指導部はまずアラブ民族派の離脱に並行してナキーブが、さらに95年にはバハルウルームもINCの存在が南部地域住民になんらの利益ももたらしていないとして活動を停止、それぞれ独自の活動に戻っている。

INCの反体制各派吸引力の喪失の原因は、まず第一に同組織が米国、特にCIAより直接の資金援助を受けて米国の利益を代表する役割を果たしているという認識が、各反体制

派に浸透していることである。第二にチャラビ議長がヨルダンのペトラ銀行に勤めていた際に資金横領の罪に問われているという問題に加えて、彼の資金運営の不明確さ、個人独裁が批判対象となっていることである。またチャラビは対イラク経済制裁の積極的支持を明言しており、それが国内のイラク国民の不評をも呼んでいる。さらに94年以降はPUK、KDPの二大クルド政党の武力対立によりクルディスタンでの活動に制約を受けるのみならず、統括機関として事態の収拾に無力であることが、一層の機能低下に繋がった。こうした背景から欧米諸国からの支援窓口としての役割も現在は低下傾向にある。

IQ07　イラク共産党　al-Ḥizb al-Shuyū ʿī al-ʿIrāqī, Iraqi Communist Party［ICP］

1935年に設立された反帝国主義連盟組織を母体とする共産主義政党。同組織は1920年代にイラク各地で成立していたフセイン・ラッハールとそのグループ、タダーモンクラブ、バスラ共産主義サークル、バグダード共産主義サークルなどが結集した組織である。共産党としての第一回党大会は1944年。当初は党としての統一を欠いていたが、ソ連での訓練経験を持つユースフ・サルマーン・ユースフ（通称ファハド）が41年に党書記長に就任して以降イデオロギー的にも組織的にも堅固な統一性を持つ党組織となり、国内諸共産主義系組織の統合に成功した。ファハドは47年に逮捕されたが獄中からも党への指令を欠かさず、48年のポーツマス条約での対英関係規定に反対する暴動（ワスバ）、同年の石油施設K3での石油労働者ストなどを組織した。49年ファハドら幹部の刑死後は指導者不在により党は統一性を失い、若年幹部の未熟さによる混乱など活動は停滞、一時期極左化したが、56年フセイン・ラーディー、アーミル・アブドゥッラーらを中心として党再編成に成功した。その結果、共産党は当時のソ連共産党の民族主義政権への協力姿勢、アラブ民族主義の台頭を反映して国内民族主義右派、バアス党と国民統一戦線に参加して当時最大の反体制組織の一角を担った。

58年カーシムによる共和制革命では実質的に大衆動員能力を持つのが同党であったことから、カーシム政権は初期において共産党を利用、農地改革などの点で同党の政策を起用したため、共産党は軍など国家機構内部に支持層を大幅に広げることに成功した。しかし同党の関与したキルクークでのトルコマン地主に対する反乱（59年）が政権内に混乱を招いたことを契機として政権から遠ざけられ、また63年以降のアラブ民族主義政権においては政敵であるバアス党による弾圧を受けてその大衆組織の多くを失った。一方67年第三次中東戦争直後、党内で武装闘争を含めた過激路線を主張するグループが党内で勢力を伸ばし、独自の共産党中央委員会を結成、バアス党政権初期まで南部湿地帯

を中心に武力抗争を展開した。

68年成立のバアス党政権は、初期において同政権の脆弱性に悩まされていたこととソ連の援助を必要としたことから共産党の合法化を認め、73年国民進歩戦線を結成して共産党員の形式的な政権参加を認めた。しかし80年に同党が軍接触を図ったとしてバアス政権は共産党を非合法化し、同党は再度地下活動に戻った。この過程でバアス政権への接近を続けるべきとするグループ（ミンバル派）が生まれ、党内の分裂を促すこととなった。さらにソ連の崩壊を経て1993年党大会で党内民主化を断行、初めて幹部を選挙により選出し、ある程度の若返りが実現している。

現在ではイラク国内ではクルディスタンを中心とし、国外ではシリア、英国、スウェーデンに多くの亡命共産党員を抱えて反体制派の中でも民主派グループを主導する立場にあるが、67年の中央委員会（非主流派）の分離、73年のバアス政権への妥協、80年代前半のミンバル派の出現など数々の路線変更の過程で離党、分裂した者も多く、50年代に誇っていた大衆動員能力は失われている。また湾岸戦争で政権の対米対立を目の当たりにして現政権への協力に転じた者もおり、反米を大義として掲げる民族主義勢力との関係をどう把握するか、という問題は常に同党にとってジレンマを生み出す原因であったといえよう。

共産党の初期の支持基盤は学生など都市知識人層であったが、農民、労働者を思想拡大の対象として党細胞の同階級における組織化に力を入れた。40年代には学生組合、労働組合の組織化を進め、特に学生・青年層に多くの支持を得、カーシム政権期にはこれら大衆組織への加盟数を大幅に伸ばすとともに、軍への浸透を果たした。党組織は緻密なヒエラルキー組織を基本とし、バアス党政権下の弾圧で大半の下部組織を失ったとはいえ、現在でも一定の大衆組織細胞を国内に持つ。宗派、民族的には初期段階では偏向はないが、特に南部貧困労働者への組織拡大を図ったことからシーア派居住地域に堅固な支持基盤を得た。特にナジャフ、カルバラの宗教界の子弟にまで共産党支持が広がったことは、イスラーム復興運動を促す契機となった。また40年代にはユダヤ人共産党員が多く存在したこと、小数民族であるアッシリア人や小数宗派のマンデア教徒も人口比率に比して党員が多かったことが特徴的である。一方でイデオロギー的に左右に揺れるに従い党内勢力の宗派・民族依存傾向も変化し、50年代後半および70年代の民族主義勢力との妥協期にはアラブ人幹部の活躍が目立ち、他方で非ムスリムの比重は低下した。また中央政権による弾圧が強化されると活動基盤を中央から遠ざけてクルド地域に重点を置かざるをえないことから、50年代前半および80年代以降はクルド勢力への依存が日

立ち、クルド地域での派閥抗争に大きく関与を余儀なくされている。

IQ08　アラブ・バアス社会主義党-イラク地域指導部（在シリア、反体制派）　Ḥizb al-Ba'th al-'Arab al-Ishtirākī, Arab Ba'th Socialist Party

1963年2月にイラク・バアス党が初めて政権奪取した後生じた党内対立で国外に逃れた勢力。当時のバアス党は左派、中道派に分かれて対立を繰り返していたが、さらにシリアのバアス党民族指導部がこれに介入して政権が混乱、同年11月アーリフ大統領はバアス勢力を政権から一掃することで安定の回復を試みた。その後地下活動に戻ったバアス党はバクル、フセインら中道・右派が中核となって党内を再編、この過程で党を追放された党員がシリアに寄ってシリア・バアス党政権下で独自の党イラク地域指導部を選出した。

シリアのバアス党政権との友好関係をもとに、シリア拠点の各派反体制組織の共闘に積極的な役割を果たし、1971年に共産党中央委員会（非主流派）、イラク社会党、イラク社会主義運動とともにイラク国民グループ（al-Tajammu 'al-Waṭani al-'Irāqī）を結成、76年以降はこれにPUKも参加した。また80年にPUK、イラク社会党、イラク共産党とともに国民民族民主戦線（JWQD, al-Jubha al-Waṭanīya al-Qawmīya al-Dīmūqrāṭīya）を設立したが、KDPの同戦線参加にPUKが反発したことから、すぐに機能停止した。湾岸戦争直前には初めてアラブ民族主義派、イスラーム派、共産党系諸派、クルド諸派が一堂に会する共同行動委員会（Lijna al-'Amal al-Mushtarak）の設立に協力したが、その後のINC設立で無力化した。現在もシリア拠点の各派の調整、共闘のホスト役を務める。

その他、シリアにおけるイラク人亡命者に対する社会的支援活動、人権擁護活動などに積極的であるが、イラク国内での国内動員力は、党単独組織としては弱小である。イデオロギー的にはバアス党シリア地域指導部のそれにほぼ追随する。

IQ09　イラク国民合意団　al-Tajammu' al-Wifāq al-Waṭanī al-'Irāqī, Iraqi National Accord Assembly

1991年設立、70年代初期にフセイン派閥と対立した元バアス党員を核とする。湾岸戦争開始とともにロンドン在住の反体制派の一部が派遣団を組織してエジプト、シリア、サウディを訪問し、その過程でサーリフ・ウマル・アリー、イスマイール・カーディリ、イヤド・アッラーウィらの元バアス党員が組織結成を決定したが、その後92年に前者二名がイヤド・アッラーウィと対立分派して、後者が現在の組織の中核となる。分裂の原

因として前者がサウディに組織支援を依存しようとしたのに対して、イヤド・アッラーウィが米国からの直接支援を志向したこと、前者の財政管理におけるスタンドプレーに後者が不満を持ったことなどがあげられる。イヤド・アッラーウィ事務局長、タハシーン・ムアッラ、サラーハ・シェイフリなど文民、軍人の8人の政治局員を核として広報局、非公然活動局、対外交渉局（他の反体制派との連絡）、国際局を持つ。組織的には弱小だが米、ヨルダン政府の支援を受け、96年2月にアンマン事務所開設、同年4月よりアンマンからイラク向け反体制放送を開始した。政治局員は全員が国外にいるが、クルディスタンを活動拠点として国内バアス党および軍に一部の影響力を持つと主張。政治綱領はイデオロギー的制約を避けるためにあえて明確にせず、恒久的憲法の設置、人権保護、差別排除、複数政党制の樹立、社会的ネットワークの構築などを基本原則とする。

IQ10　イスラーム行動組織　Munazzama al-ʻAmal al-Islāmīya, Islamic Task Organization

ムハンマド・タキ・アルムダッリシを長とする。公式の設立年次は1976年であるが、それ以前から文化・宗教活動を行っていた。シーア派中心の主要イスラーム運動の中で唯一ダアワ党を前身としない組織。シーア派ウラマーの最高権威であるマルジャイを、いかなる政治組織をも超越しウンマを指導する存在として位置付けるムハンマド・アッシーラージの思想を中核とするため、その前身はマルジャイ運動と呼ばれる。シーラージーに師事するカルバラ出身者が主流を占めることからシーラージー派とも呼ばれ、ナジャフのハウザに対抗するカルバラのウラマーの地域性が反映された組織である。組織加盟者はSCIRI、ダアワ党に比較して少ないが広報・宣伝力に優れており、社会慈善活動、教育福祉などにも力を持つ。国外ではシーラージー支持者の多いサウディ東部、バハレーンにも影響力を持つが、本部はムダッリシの居住するテヘランにある。

IQ11　クルディスタン・イスラーム運動　al-Ḥaraka al-Islāmīya fīl-Kurdistān, Islamic Movement in Kurdistan

イラク・イスラーム同胞団のメンバーであったウスマーン・アブドゥルアジーズを指導者として、同胞団傘下のクルド人メンバーを中心に87年設立。前身は83年同氏設立のイスラーム紐帯（al-Rābiṭa al-Islāmīya）。弟でスポークスマンのアリー・アブドゥルアジーズを実質的な政治指導者とする。両者がハラプチャ出身であることから88年の同地に対するイラク政府の化学兵器攻撃以来活動を活発化させ、一定の軍事組織を持つ。クル

ド民族運動史における初めての組織的イスラーム政党。92年のクルド議会選挙では第三位の得票数を得たものの、規定比率に達せず議席を得られなかったことに不満を持つ。KDPと友好関係を持ち、支配領域の近接するPUKと対立、93年に大規模な軍事衝突を起こす。96年にPUK排除後はKDP主導クルド政府下で無任所国務相のポストを得る。ウスマーン・アブドゥルアジーズはサウディ在住で、同組織へのサウディの支援が指摘されている。同じスンナ派のイラク・イスラーム党と密接な関係を維持するほか、シーア派イスラーム諸政党とも一定の関係を持つ。

IQ12　イラク・イスラーム党　al-Ḥizb al-Islāmī, Iraqi Islamic Party

40年代よりスンナ派のムスリム同胞団をベースにして組織化された。同胞団としては48年中東戦争にジハードとして参加するなどの活動を展開し、カーシム政権下の複数政党制政策で同党の名称を持って政党設立申請した。申請は当初拒否されたものの、その後6カ月間のみ合法化され、その間新聞発行を行い政府批判を展開したため幹部投獄を経て地下活動化する。バアス党政権では初期に同胞団員のアブドゥルカリーム・ザイダーン、同胞団シンパとされるマフムード・ハッターブが閣僚登用されるなど一定の友好関係を維持していたが、71年以降再度弾圧が開始された。クウェイト危機後国外スンナ派イスラーム主義者が同じ名前を継承して活動再開。ムスリム同胞団の支持基盤を引き継いでイラク国内スンナ派イスラーム運動の主流となるが、国内での大衆動員力はさほど大きくない。同胞団時代にはシーア派のイスラーム政治組織が存在しなかったことからシーア派の同胞団参加者もいたとするが、現在では特に関係を持たない。ただしクルド・イスラーム諸政党は同胞団系のものが多く、友好関係を維持している。

同胞団時代からの指導者としてノウマーン・アッサマライがおり、現在サウディアラビアのキング・サウード大学で教鞭を取る。

IQ13　自由イラク評議会　Majlis ʻIrāqī al-Ḥurr, Free Iraqi Council

実業家のサアド・サーリフ・ジャブルを党首として 1990年ロンドンにて設立。前身は同氏がロンドンにて82年設立した新ウンマ党で、特定宗派、特定民族によらない反政府活動を主張、21人の中央委員会もアラブ、クルド、スンナ、シーア、キリスト教徒と万遍ない構成をとる。ただし実際には指導者が王制末期のシーア派元首相であるサーリフ・ジャブルの息子ということもあって、シーア地域の非宗教的知識人、南部部族的名望家などが主要メンバーに多い。政策的には全般的に右派リベラルで、欧米在住の亡命

イラク人による反体制活動としては活動歴が長い部類に入る。現在の政治目的を、すべてのイラク人に対する食料・医療品の公正な分配、フセイン政権下のイラク国民の惨状を国際社会に訴えること、恒久的人権擁護の為イラクにおける民主的政府の樹立（言論の自由、選挙の自由、軍の非政治化を含む）、に置く。

党首のジャブルは50年代から米国で教育を受け、68年にイラクを脱出するまで国内で英米企業の代理事業を行っており、その英米との繋がりが氏の政治活動を支えている。バアス党政権成立時に、米国派として初期に政権参加したナースィル・ハーニー元駐米大使とともに政権における親米派の伸長を画策した結果、国外脱出を余儀なくされたとも伝えられる。湾岸戦争期にサウディがロンドン在住の反体制派を招聘、組織化しようとした際の主勢力の一つで、サウディからイラク向け反政府放送を行った最初の組織であったが、現在は外国からの支援は減少している。なお94年にヨルダンで政権転覆工作を画策していた中央執行委員ターリブ・スヘイルがイラク人外交官に殺害されている。

IQ14　イラク国民民主合意団　al-Tajammuʿ al-Wifāq al-Waṭanī al-Dīmūqrāṭī al-ʿIrāqī, Iraqi National Democratic Accord Assembly

1992年5月バアス党元地域指導部メンバーのサーリフ・ウマル・アリーが、イヤド・アッラーウィのCIAとの密接な接触を不満としてイラク国民合意団から分派して設立。70年代初期にフセイン派閥と対立した元バアス党員を核とするが、基本的にはサーリフ・ウマル・アリーの個人運営。初期には同氏のバアス政権での政治経歴から軍、党に対する反政府工作の可能性が期待されてサウディの支援を得ていたが、現在ではほとんど注目されない。

IQ15　イスラーム・ブロック　Kutla Islāmīya, Islam Block

成立年次不明（湾岸戦争直後の成立と推測される）。スンナ派のウラマー、ムハンマド・アルーシーを中心とするが、アフマド・リカービーなどシーア派の幹部もおり、諸イスラーム組織の中ではスンナ、シーア両派が共闘した希なケースである。スンナ派諸組織が同胞団を、シーア派諸組織がダアワ党を出発点としているのに対して、同組織はこれらとは距離を置いた存在。組織的には弱小で、アルーシーはサウディ在住。

IQ16　トルコマン・イスラーム党　al-Ittiḥād al-Islāmī li-Turkmān al-ʻIrāq, The Islamic Union of Iraqi Turkomans

アッバース・バヤーティ事務局長、ムハンマド・シャマーリ書記長。少数民族のトルコマン人は半数がシーア派であるが、トルコマン民族運動の弱体に不満を持つ中で60年代半ばからダアワ党によるキルクーク在住トルコマン人への活動が浸透、同民族内にイスラーム運動が広がった。91年、元々ダアワ、SCIRIに加わっていたシーア派トルコマン活動家が独自政党を結成するだけの組織規模となったため、これらの組織から分離して結党。基本的にダアワと政治的方向性を一にするが、トルコマン民族の一定比率での政権参画、トルコマン民族居住地域の自治、民族的特質の保持を主張する。トルコ系民族ではあるが、現在のトルコとの民族的一体性については否定的。

IQ17　クルド・イスラーム連盟　al-Ittiḥād al-Islāmī al-Kurdistānī, Kurdish Islamic Union

イラク・イスラーム同胞団出身のクルド人により1994年設立。軍事組織を持たず、救済活動を中心とする。設立当初は弱小であったが急速に支持を広げ、96年のKDP主導のクルド政府には無任所国務相のポストを確保した。指導者はサラハッディーン・ムハンマド・バハッディーン。

IQ18　クルド共産党　al-Ḥizb al-Shuyūʻī al-Kurdistānī , Kurdistan Communist Party

1967年以来イラク共産党の地域組織として存在していたが、1993年、イラク共産党より分かれて設立。クルド地域における活動に依存するイラク共産党が、同地域においてより地域性を強く持った組織を設置する必要があったためであり、同党幹部がイラク共産党中央委員を兼ねるなど、事実上イラク共産党の下部組織として位置づけられる。92、96年のクルド政府に参閣。

IQ19　クルド人民民主党　Ḥizb al-Shaʻb al-Dīmūqrātī al-Kurdistānī, People's Democratic Kurdish Party

81年、サーミー・アブドッラフマンを指導者として結成。75年のKDP崩壊後一部KDPメンバーが暫定指導部として残存していたが、79年にバルザーニー族が亡命先の米国からイランに移住、暫定指導部に加わった結果、上記の残存メンバーが分裂してその一部が新たに同党を結成した。1992年にクルド社会党、「革命の意見（ra' i al-thawra)」党

(PUKの分派）と統合してクルド統一党と変名、さらに93年には分裂して一部がKDPに吸収された。指導者のアブドゥルラフマンは現在KDPのスポークスマン。

IQ20　クルド部族会　Jam'iya al-'Ashā'ir al-Kurdīya al-'Irāqīya, Kurdish Tribal Society

ロンドン在住のジョウハル・スルチーらスルチー一族を中核として1991年設立。63年以降スルチー一族は、支配領域の隣接するバルザーニー族主導のクルド民族運動に反発してイラク体制内協力姿勢を取ってきたが、湾岸戦争以降反体制に転換した。しかしバルザーニー族との対立は解消されず、KDPに反発する30部族が参加する同組織を結成。96年にはスルチー一族部族長がKDPの手で暗殺されるといった事件を経てPUKと協力、反バルザーニ勢力の結集を図る。国内的影響力は小さいが、財力を持つ一族であると言われる。

IQ21　イラク社会党　al-Ḥizb al-Ishtirākī fīl-'Irāq, Iraqi Socialist Party

1966年成立、アラブ統一と社会主義（非マルクス主義社会主義、社会的公正に重点を置く）を目標とし、基本的にはナセリズムを信奉する。ラシード・ムフセン初代事務局長（軍人）は、アーリフ期の公安局長でバアス党の弾圧を受けてカイロに亡命、エジプトのアラブ民族主義者との友好関係を獲得する。バアス政権成立時には幹部四人が処刑された。78年以降事務局長にムブディル・ワイス（通称アブー・ウルーバ)。クルド政党との共同戦線を通じて70年代末までクルディスタンにも活動拠点を持っていたが、現在はシリアを中心にした海外活動が主流。

IQ22　アラブ社会主義運動　al-Ḥaraka al-Ishtirākīya al-'Arabīya, Arab Socialist Movement

アブドゥイッラー・ナスラーウィ中心に1968年に成立、アラブ民族主義運動（ANM）のイラク人メンバーを母体とする。ナセリズム・マルクス主義社会主義を思想核とし、イラクにおけるナセリストグループとしてはイラク社会党とともに最大組織。前身のアラブ民族主義運動は63年アーリフ政権期にバアス党に対するカウンターバランスとして政権に重用され、大衆組織への浸透を見せたが、バアス政権下でバアス党に吸収されるか、弾圧の結果国外亡命した者が多い。ヒシャーム・アリー・ムフセンなどアラブ民族主義運動の元幹部とは事務局長のナスラーウィが個人的な関係を維持しているものの、

同運動自体がかつてのイラク人ナセリストグループを組織的に統括できる能力はない。活動中心はシリア、レバノン。

IQ23　イラク民主主義者連盟　Ittiḥād al-Dīmūqrāṭīyyīn al-ʻIrāqīyyīn, The Association of Iraqi Democrats

1990年設立、海外在住の元イラク共産党員中心に組織され、70年代の共産党のバアス政権との連合およびその非民主性を批判して分派。主な指導者はムハンマド・ザーヒル、ファールーク・リダー。組織的には海外組織のみの弱小集団ながら、国外で諸政党間の橋渡しに力を入れ、ソ連崩壊後の共産党の退潮を機として共産党に代わる民主的集団として左派組織の中心を狙う。

名前のみ

IQ24　ナセリスト統一集団　al-Tajammuʻ al-Waḥdawī al-Nāṣirī

IQ25　民主民族集団　al-Tajammuʻ al-Qawmī al-Dīmūqrāṭī

IQ26　イラク・ムジャヒディーン運動　Ḥaraka al-Mujāhidīn al-ʻIrāqīyyīn

IQ27　イスラーム幹部運動　al-Kawādir al-Islāmī, Movement of Islamic Cadre

IQ28　イマーム戦士運動　Ḥaraka Jund al-Imām

IQ29　クルド・カーデヒー党　Ḥizb Kādiḥī Kurdistān

IQ30　クルド保守党　Ḥizb al-Muḥafiẓīn

IQ31　イラク国民改革運動　Ḥaraka al-Iṣlāḥ al-Waṭanī fil-ʻIrāq

IQ32　イラク民主団　al-Tajammuʻ al-Dīmūqraṭī al-ʻIrāqī

IQ33　アッシリア国民運動　al-Ḥaraka al-Dīmūqrāṭī al-Āshūrīyyīn

IQ34　トルコマン国民党　al-Ḥizb al-Waṭanī al-Turkmānī

IQ35　在北米イラク民主連盟　Ittiḥād al-Dīmūqrāṭī al-ʻIrāqī fī Amirīkā wa Kanadā, Iraqi Democratic Union in USA and Canada